書評

本願寺史編纂所編
本願寺史 第一巻

赤松俊秀

今春西本願寺で執り行われた親鸞七百回忌を記念して、浄土真宗本願寺派では本願寺史三巻・付一巻の編修出版を企画し、龍谷大学図書館内に本願寺史編纂所を設け、宮崎円遵博士を主任として数年前からそのことに当たっていたが、今年三月末日をもってその第一巻が発刊された。序文によると、この書は、宗門の行程には幾多の曲折があったけれども、そのつど難局を打開し教勢の発展をもたらしたものは宗祖親鸞の立宗精神とこれに続く遺弟の念力にほかならないとして、仏教諸宗派のうちでも教義風格において最も民衆生活に直接し、七百年の長きにわたって在家仏教の特色を発揮してきた真宗のあり方を明らかにするために編修されたとしている。目次は、序説、宗祖親鸞聖人とその教団、大谷廟堂の建立と推移、覚如宗主と本願寺の形成、本願寺教団の漸興、蓮如宗主と本願寺の興隆、本願寺の社会的発展、本願寺と織豊政権の八章に別れ、序説以外の章はさらに節に細別されている。第一巻に割りあてられた時代は真宗史の研究が最も進んでいる分野であり、長年その究明に専念された宮崎博士が主宰されただけあって最近三四十年の研究成果を取り入れて遺漏がなく、史実の叙述は正確な史料に基ずいて行なわれ、評価もおおむね妥当に加えられている。真宗史の研究は、今から五十年前の明治末期にようやく研究方法が明確に意識され、それ以後、宗内外の学者の協力によって従来根拠が明らかでなかった親鸞の実在の立証をはじめとして多くの成果をあげたが、それだけに異論も多く、学界の見解が一致する評価はさして多くない、といってよい。そのうえに、以前ほどではないが、真宗が東西両派以下十派に分派していることが、捕われない公正な立場から真宗史を編修することを困難にしていることも否定できない。故山田文昭氏の真宗史稿などは、このような障害を最初に切り開いたすぐれた業績であって、その価値は今でも高く評価されている。この書も、本願寺史とはいいながら、高田派以下の諸派についても注意して、本願寺との関係は事実に即して記述されている。学者の意見の一致しない史実についても、一方的な見解のみを取りあげて他を顧みないというかたくな態度ではなく、異説のあるところは、できるだけ穏当な見解に従うが、編者の私見に属するものもある、と凡例に断っているほどである。このような心づかいをして著わされたこの書が、今後の真宗史研究のよき指針となってその水準を高めることは、評者の信じて疑わないところである。

ただ一つ気になるのは、飛鳥・奈良・平安仏教を民族宗教的性格を持つものとして、その特色を非伝道性・非人格性と規定し、仏教であって仏教でないかのような評価を与えていることである。真宗成立の仏教史的意義を強調するためには、それに先行した仏教のあり方を批判することが必要であることはいうまでもない。この書も、

飛鳥・奈良・平安仏教を一括して非仏教的としているのではなく、聖徳太子・行基・最澄・源信・源空などの行実は高く評価している。その態度が慎重であることはよく承知しているが、飛鳥時代以来、出家者中心の教団が置かれた政治情勢にあまりに重点をかけて、教団の基本的性格を論じるのは、必ずしも適切とはいえないのでなかろうか。宗教と政治は分離すべきものであることは当然であるが、仏教は、キリスト教などとは異なつて、政治と宗教とは隔絶すべきものとは伝統的に考えておらず、いわんやみずから権力支配を行おうなどとはしなかつたからである。権力者にあまりにも多く奉仕した律令仏教を非仏教的と評するなら、同様の批判は、本願寺教団の非人格性強化や一揆による領国支配にもきびしく加えらるべきであろう。それがこの書に明確に見られないことは、いささか片手落の感を禁じえないのである。

それにしても本願寺史をここまでに纒めあげた関係者の苦労は並々ならぬものであつたと推測される。続いて出版されるはずの第二・三巻は、既往の研究成果から推して、その編修は容易でない、と思われるが、困難をのりこえて一日も早く編修の完了することを切望してやまない。A5五五四ページ、図版別刷七葉、非売品、なお残本が若干あるので希望者は西本願寺伝道部にあてて金一、〇〇〇円と送料を添えて申込まれたいとのこと。

R. J. C. Butow, Tojo and the Coming of the War, pp. 584. Princeton, New Jersey, 1961.

中山治一

十二月八日――著者のいう「戦争の到来」から、ちようど二十年目の同じ月の同じ日に、この著書の書評を筆をとるめぐりあわせになつた。これはもちろん偶然であるが、しかし、その戦争の終結から十六年目、東条英樹の処刑から十三年目に、この『東条と戦争の到来』が刊行されたという事実は、同時代のできごとを客観化して眺めるのに必要な時間的距離という問題に関連して、したがつて現代史叙述の基本的な問題にかかる事柄として決して無意味なことではないであろう。

さて、作品を理解するためには、まずその著者を知らねばならないとは、一般にいいうることであろうが、しかし本書については、そのことがいつそう深刻な意味をもつているようにおもわれる。なぜなら、もし太平洋戦争への応召、軍務としての日本語の勉強、ついでマッカーサー司令部の情報部での勤務というような、いわばいくつもの偶然が外から彼に課した著者の生活体験がなかつたと仮定すれば、本書が著者によつて書かれるようなことは、ほとんど起りえなかつたであろうと考えられるからである。復員除隊の後、著者はスタンフォード大学でふたたび学生生活に入るが、卒業後、こんどは歴史専攻の学者として、昭昭二十六年秋から数カ月間、日本に